九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「わたしの親戚のモリノー少佐」についての諸解釈

元田, 脩一

https://doi.org/10.15017/2332716

出版情報：文學研究. 74, pp.129-146, 1977-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『わたしの親戚のモリノー少佐』についての諸解釈

元田脩一

1

アメリカは短篇小説の系譜をニュー・ゴシックとアメリカン・ユーモァと開眼の物語（イニシエイション・ストーリー）に分類できるとすれば、(1) ホーソンの『わたしの親戚のモリノー少佐』“My Kinsman, Major Molineux”は開眼の物語の嚆矢としての名誉を担う作品であるが、Q・D・リーヴィス一流の解釈によれば、これは「歴史的変遷の寓話」(2)であり、精神分析学的批評家によれば、「親戚――及び父親――に対する若者の敵対的、反抗的感情の物語」(3)であり、そうした多様の解釈を評するということは、N・F・ダブルデイにいわすれば、ホーソンが「その意図の達成に失敗したこと」(4)に起因しているということになるが、果たしてこの作品の実体はそれほど曖昧模糊としたものであろうか。

この作品に対する論評の口火を切ったのはリーヴィス女史で、彼女にしたがえば「典型的な農婦兼牧師の息子である頑健で敬虔な若者のロビンは、若いアメリカをあらわしており、」(5)「その名前が軍人ならびに貴族としての身分を暗示している」(6)ところのモリノー少佐は、「ニュー・イングランドにおける英国の民事的・軍事的支配を代表する」(7)ものであり、この物語は英国の支配に対する植民地の拒否反抗を、「ペイジェントと儀式劇の中間形式」(8)にもよって象徴的に表明した歴史的寓話にほかならず、したがって女史は、この作品に「，アメリカ成年に達す・というような説明的副題」(9)が付加されていたならば、「このすばらしい物語が一般に見落されたり、誤解されたりすることはより

少なかったことだろう」[10]と述べている。

次に、このリーヴィスの解釈を受けついだD・G・ホフマンによれば、「ロビンはわが国の国家的認知にとって原型的な意味をもつところの文化的・政治的体験を、最初は目撃し、次にはそれに参加したものとして、事実上代表的なアメリカ人であり、」[11]モリノーはニュー・イングランドにおける英国の権勢をあらわすばかりではなく、「秩序と伝統と安定を象徴する」[12]ものであり、さらにまた'Sacrificed King, the Royal Scapegoat'[13]でもあるとして、次のように述べている。

「フレイザーはScapegoat Kingを二つの機能を賦与された儀式上の役割として分析している。すなわち、放逐される悪と、その凋落した勢力が若い継承者によって更新される神聖な支配者の犠牲の死である。この現代の文化人類学の学説を一八三二年にホーソンが利用したということはありえないが、われわれは彼の物語から、彼がモリノー少佐の没落の描写に隠喩的に用いたところの、原始的儀式に関する彼の直観的理解を推測することができる。物語における暴動は漠然と一七三〇年頃とされているが、明らかに独立戦争の「型」なのである。これは実際旧秩序と新秩序の交替であって、そこからアメリカ社会のエネルギーが復活したのだ。」[14]

そして、このScapegoat Kingとしてのモリノーに対し、暴徒の指揮者であるところの顔を赤と黒に塗りつぶした人物を、ホフマンは「戦いと死と破壊」[15]の象徴ととり、彼を「暴動と混乱と無政府状態の君主の役割を果たす」[16]ものと見做し、「彼の支配は偽りの支配にすぎず、それは社会の浄化と再生のために必要な一時的な感情的放逸の時期である」[17]といい、そのことは独立が達成されるまで植民地が経験しなければならなかった過渡期的現象にほかならないと論じている。

このように、『わたしの親戚のモリノー少佐』をニュー・イングランドの歴史的変遷をあらわす寓話ととる解釈に

対して、ダブルディは素材の面からこの作品を検討した上で反対を唱えているのである。

すなわちダブルディは、この作品の最初のパラグラフをなす緒言（プレフィス）において歴史家としてのトーマス・ハチンソン――有力な政治家でもあった彼は、マサチューセッツ湾植民地の副総督を経て、英国王任命の最後の総督となった。――への言及がなされていること、ホーソンが児童向きの歴史物語として書いた『祖父の椅子の全歴史』*The Whole History of Grandfather's Chair* の第三部第三章のハチンソン邸襲撃事件が、当のハチンソンの著『マサチューセッツ湾植民地の歴史』*The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay* をもとにして述べられていること。

その著者においては、暴徒たちが変装した二人の指揮者に率いられて当時副総督であったハチンソンの屋敷に侵入したことや、民衆の多くがその暴動計画を知っていたにもかかわらず、誰一人としてそれを阻止するものがなかったことが書かれていて、それらの点が『わたしの親戚のモリノー少佐』に描かれた暴動の様子と類似していること、さらにその暴徒の主体をなしたのが印紙条例に反対して結成された「自由の子ら（サンズ・オヴ・リバティー）」と称する秘密結社の連中であり、相手の体にタールを塗って羽毛をまぶすという彼らのリンチの方法がモリノーに対して用いられていること――などをあげて、『わたしの親戚のモリノー少佐』の素材はハチンソンの著書に述べられているところの、一七六五年八月二六日夜の暴徒によるハチンソン邸襲撃事件であると推定している。[18] そして彼は、この素材の面からこの作品を解釈して次のようにいう。

ロビンの困惑は、彼が最近の町の出来事についてなんらの知識もなしに、暴動が予定されていた夜ボストンに到着したためである。その暴動においては彼の親戚が犠牲にされることになっており、彼が出合う殆どすべての人々がその暴動のことを知らされていて、多分に楽しみにしてそれを待ちうけているのだ。[19] 彼は暴徒の指揮者に遭遇するし、奇怪な服装で変装した人々に出合う。[20] と、その連中は「自由の子ら」の合言葉で彼に話しかけ、彼が理解しないと、平明な英語で彼を罵倒するのだ。……

この物語の重要な効果が、持続的な劇的アイロニーであることは確かだ。ロビンは独立運動の政治の世界にあまりにも無知であるために、道を尋ねる彼に対しての人々の反応の意味を理解できないし、その拒絶になんらかの意図があることを見ぬけないのだ。独立前の時代の歴史と「自由の子ら」の活動を幾分なりとも知っている読者なら、すべての場合にロビンの先を読みとり、歴史的には十分に明白な状況に関して、ロビンが無知のままに行動しているのを観察するだろう。そこで、ロビンが自分の頭の良さと、困難は棍棒で解決しうるという感情と、偉いモリノー少佐の縁者であるという虚栄心に縋りついていることが、読者の知識に対する鮮明な対照となって感じられるのである。」[21]

このようにダブルディは、ロビンが独立戦争前の政治情勢に全く無知であることを強調し、「なぜ自分の親戚がタールを塗られ羽毛をまぶされるのか、そのわけを彼が知っているということを示唆するものは何一つない」[22]といい、ロビンには歴史的・政治的変遷に対する自覚が完全に欠如していることと、この作品にはアメリカ独立の理念が謳い出されていないこと、ならびに、この作品における売春婦の挿話にはなんらの寓話的意味も見出されないことをあげて、この作品をアメリカの独立につながるところの、歴史的・政治的変遷をあらわす寓話として受けとることに反対しているのである。[23]

確かにこのダブルディの主張は真を穿っており、ロビンのモリノー・リンチ事件の目撃は、客観的現実に対する自分の錯誤をあばかれる一人の若者の個人的体験として描かれていて、それを歴史的・政治的変遷に関するアメリカ人の国民的体験ととるのは、明らかにこの作品を歪曲するものといわねばならない。S・グロスもまた歴史的寓話としての読み方に反対し、「この物語をある程度長く論じた最初の批評家であるQ・D・リーヴィス夫人が、不幸にしてそれを読み違えたのだ」[24]と述べている。

グロスによれば、この物語の意味は、単純素朴な若者がそれまでの自分の人生に対する対応様式が偽りであったことを自覚するということであり、[25]彼の町における体験は「暗黒の無知から痛々しいほど照らし出された知への旅」[26]な

のであり、赤と黒に塗りわけられた男の顔は、そのロビンの体験――「原始の楽園という暗闇の無知から、悪魔的知という苛烈な火への旅」[27]――の外的表現にほかならないのだ。[28]

このグロスの解釈に、R・B・ウェストによる開眼の物語（イニシエイション・ストーリー）の定義「この種の物語に通常作中人物の無知から知への進展を描き出す」[29]をあてはめれば、グロスがこの作品を開眼の物語として受けとっていることは明らかである。そして実際、この作品の実体は開眼の物語そのものにほかならないのであるが、このグロスをはじめ開眼の物語としてこの作品を捉えた批評家たちの解釈は、一様に形式的・表面的で、その内包的意味を抉り出してはいないというのが実情なのである。

たとえば、W・B・スタインはこの作品にイニシエイションの儀式形態を認め、その梗概を次のように区分している。

「㈠歴史的背景を述べた導入部　㈡七つの出合い（1渡し守、2杖をもった老人、3宿屋の主人、4深紅のペチコートをはいた女、5夜警、6赤と白に顔を塗った男、7ヘルパーとなる人物）㈢認知の場面、㈣受け入れの儀式、㈤選択。」[30]

そしてスタインによれば、ロビンが河を渡ることは彼の再生を予示しており、彼が七人の人々に合うのは「七は常に聖なる数と考えられる」[31]からであり、「七つの出合い」においてロビンが絶えずガイダンスを求めながら拒否と嘲笑にあうのは、彼の受けねばならない試練であり、深紅のペチコートの女は誘惑者で、ロビンがその誘惑に打ち勝ったのちに会う人には、情況がロビンにとって好転したことを示していて、彼がモリノーに会いお互を認知したとき、「今や彼は青春時代の不完全さと妄念を浄化して、新しい環境に自分の位置を占める用意ができたのだ」[32]とスタインはいう。ついでロビンがその夜に会った人々から再び嘲笑される場面は、スタインにいわすれば「ロビンのそれまでの敵対者のすべてが、彼らのまなかにロビンを迎え入れる」[33]ところの「受け入れの儀式」であり、最後にロビンが町

にとどまるよう傍の紳士と忠告される「選択」の場面に関しては、「最終的な選択はおこなわれていないとはいえ、ロビンがその試練の教訓を完全に理解し学んだということは、彼の自己を卑下する言葉を根拠に推知することができる」[34]とスタインは述べているのである。

しかし、このスタインの解釈では、なぜ人々のロビンに対する再度の嘲笑が彼を町に迎え入れる儀式となるのかわからないし、ロビンが「完全に理解し学んだ」という「その試練の教訓」が一体何なのか、全く不明なのである。

また、まえのグロスの解釈によれば、ロビンは今までの自分の人生に対する対応様式が偽りであったことを自覚することにより知に達したわけであるが、そのロビンの人生に対する対応様式とは具体的に何なのか、どのようにして彼はその対応様式が偽りであることを自覚したのか、彼が知ったことは、今までの対応様式が偽りであったということだけなのか、それらに対するグロスの説明は極めて曖昧であり、さらに彼は、ホーソンが「片頬の赤色は火と剣の象徴であり、別の頬の黒色はそれらに伴う悲嘆の表示と説明した暴動の指揮者の顔色を、なんらの釈明なしに、ロビンの無知から知への進展の外的表象と断定しているのである。

開眼の物語としてのこの作品の本質を解明するには、まずロビンの人生に対する対応様式を把握した上で、ロビンと町の人々との相互反応を追究し、ついで赤と黒に顔を塗りつぶした男と彼に率いられた暴徒がロビンにとっていかなる象徴的意味をもっているかを確定することによって、ロビンの開眼の内容を見極めねばならない。

2

自己中心の子供の世界は、太陽は神の子である人間に温かい光を注ぐために地球を廻わると信じていた中世人の世界に類似しているといわれているが、ロビンの人生に対する対応様式が形成されたのは、そうした自己中心の閉ざされた世界においてである。そこにおいて彼は、慈愛深い両親に庇護され、純朴な一人の兄とやさしい二人の妹にかこ

まれ、頭がよく頑健で、将来を町の有力者である親戚に保証された少年として成長し、自分の知性と体力と身分によって立身出世を遂げうるものと信じていたのだ。この閉ざされた世界におけるロビンの自分自身の知性・体力・身分に関する認識こそ、彼の人生に対する対応様式にほかならず、それは「わたしは頭のいい若者だという評判です」と語る彼の自負を、彼が振りまわす棍棒と、彼が連発する「わたしの親戚のモリノー少佐」という言葉に表明されているということができる。だが、その対応様式は閉ざされた世界においてのみ通用するものにすぎず、開かれた大人の世界においては、彼の自己認識は錯覚であり、妄想であり自惚れであって、彼がそのことを悟るとき、彼はそれまでの自分の人生に対する対応様式が偽りであったことに気づくのである。ロビンの町での彷徨は、彼の自己中心の主観の世界が客観的現実によって漸次打破され、遂に彼がその対応様式を放棄するまでの体験であり、同時にそれは、彼が人生の新たな様相に眼を開く過程でもあるのだ。そしてホーソンは、ロビンがその対応様式を放棄するまで終始皮肉な眼差で彼を眺め、ロビンの現実に対する錯誤を町の人々の嘲笑の対象としているのである。

渡し守にモリノーの住所を聞きそんじたロビンは、彼が尋ねていたら渡し守は二つ返事で彼を案内し、モリノーから謝礼を貰っていただろうにと思い、町で最初に見かけた尊大な人物に追い縋り、その服の裾を摑んで、傍の床屋の理髪師たちを驚かすほどの大声でモリノーの住所を問いただす。と、その光沢のある杖をついた尊大な老人はロビンの非礼に激怒し、「わしには権限があるんだ。……お前を足枷になじませてやるぞー」と怒鳴り、理髪師たちは露骨な嘲笑をロビンに浴びせる。そしてそれに対するロビンの反応を、ホーソンは次のように述べているのである。

「彼は自分の質問の結果に最初は相当驚かされたが、頭のいい若者だったので、自分でその謎を解くことができるとすぐに考えた。そして彼の結論はこうだった。'あいつはわたしの親戚の屋敷の内部を見たこともない田舎出の代議士で、礼儀正しく他人に返事する作法を知らないのだ。あいつは老人だが、そうでなかったならば実際――引きかえしてやつの鼻柱をなぐりつけてやりたいく

らいだ……」

ここで作法を知らない田舎者はその老人ではなしに、ロビンであることはいうまでもなく、リンチを受けたモリノーをロビンが目撃するクライマックスの場面でホーソンは、ロビンが「わたしの親戚の屋敷の内部を見たこともない」と考えたこの老人を壮大な邸宅――ロビンはそれがモリノーの屋敷と錯覚していた――の持ち主として登場させており、この老人が懲罰の権限をもっていて、モリノーに対する暴動を傍観している町の権勢家であることは明らかであるが、ホーソンは町にやってきたロビンをまずこの老人に会わせることによって、ロビンの人生への対応様式の現実からのずれを皮肉っているのである。

（ちなみに、モリノーの地位に関しては、この作品の緒言において英国王任命の歴代総督が人民の反抗に会ったこと、政治的擾乱の時期には彼らに仕える王党派の下級の役人でさえも平穏な生涯を送れなかったことが述べられているので、それから推測すればモリノーは総督か、王党派の役人と考えられるが、本文すなわち作品そのものにおいては、彼は「文武の高位についた」と述べられているだけで、彼が杖をついた老人の上司であったのか、その部下であったのか断定することは不可能で、ホフマンは彼を「英国王任命の総督」といい、[35] ダブルデイは「王党派の下級の役人」と見做し、[36] M・カウリーは奇怪なことに彼を「詐欺師」と考えているのである。[37] さらにまた、たとえこの作品の素材がダブルデイの推測通り一七六五年八月二六日夜のハチンソン邸襲撃事件であったにせよ、ホーソン自身はこの物語を「百年よりさして遠くない頃」に設定しており、この作品が一八三二年号の「トークン」*The Token* に発表されていることからすれば、それは一七三〇年頃となって、一七七五年に勃発した独立戦争から四五年も以前のこととなり、印紙条例に反対して結成された「自由の子ら」の活動とこの作品のモリノー・リンチ事件とはなんらの関係もないことになってしまう。事実ホーソンは「自由の子ら」という言葉を一度も用いてはおらず、実在の歴史上の

人物を登場させることもせず、ボストンという固有名詞すらさけていて、総督と植民地人民の軋轢抗争を概括した緒言とは裏腹に、作品そのものにおいては政治的情況を完全に消却し、暴動の原因を作品の埒外においており、ダブルディのようにこの作品をハチンソン邸襲撃事件に結びつけない限り、この作品が独立戦争前の政治情勢に関する主人公の無知を諷刺したものとは考えられないのである。）

ついでロビンは彼の目にとまった宿屋兼居酒屋に入っていくが、その宿の主人がフランス系移民特有の慇懃な物腰で挨拶すると、ロビンはすぐに、その主人が自分とモリノーの顔の類似を読みとって自分に追従しているのだと思い込む。そして彼が、今日は財布が空だから宿泊のためではなく、モリノーの住所を聞くために立ち寄ったのだと告げると、そこにいあわせた客が一斉に振り向くが、ロビンはそれを、皆が彼をモリノーのところに案内したがっているのだと解釈する。が、宿の主人は壁に貼られた逃亡奴隷の人相書を読み上げながらロビンの顔を見て出て行けという。そこで、ロビンは田舎からもってきた樫の棍棒を握りしめるが、客の顔に一様に異常な敵意があらわれるのを見て、皆の哄笑をあとにそこを立ち去る。そのときのロビンの反応は次の通りである。

「'こりゃ不思議じゃないか' とロビンは例のいい頭を働かせながら考えた。'財布が空だと白状したことが、わたしの親戚のモリノー少佐の名前よりも重みがあるなんておかしいではないか。わたしとわたしの樫の若木が一緒に育った森の中で、あのゲラゲラ笑っている悪漢どもの一人に会うことがあったら、たとえわたしの財布は軽くとも、わたしの腕は重いということを思い知らせてやるんだが。'」

ここでは客観的現実に対するロビンの主観的世界のギャップが如実に描き出されていて、そのギャップに対するホーソンの皮肉はいよいよ痛烈である。「わたしとわたしの樫の若木が一緒に育った森の中」でしか彼の腕力は適用しないのと同様に、彼が「例のいい頭」を働かせても、「わたしの親戚のモリノー少佐」という呪文がなぜこの町で通

用しないのか彼にはわからない。そのことは、自分の知性・体力・身分に関する彼の認識が開かれた世界においては通用しないことを示している。しかしながら、彼がこの体験によって自分の人生に対する対応様式に疑惑を抱き始めたことは明らかで、以下その疑惑は次第に強まっていく。

次にロビンは繁華街を歩き廻わるが、大勢の人々のまえでモリノーの住所を聞く気になれず、卑しい家並の街路に出て深紅のペチコートをはいた女に尋ねて彼女の誘惑にあうが、夜警の出現によってその誘惑を免れる。が、その夜警も眠そうな笑い声を返すのみでモリノーの住所を教えてはくれない。そこで、ロビンは自分がまるで魔法にかけられてモリノーの屋敷から遠ざけられているような気持ちになり、教会のところまできたとき、急ぎ足で傍を通り過ぎようとする男の前に立ちはだかり、棍棒を突きつけてモリノーの住所をただす。と、その男は覆いをとって赤と黒と塗りわけた顔をロビンに見せ、一時間したらモリノーがここを通るといって立ち去り、ロビンは「旅人というのは不思議なことを見かけるものだ」と呟きながら教会の入口に腰をおろし、一瞬今会った男のことを考える。

「ほんの僅かな時間が、今彼のもとを去った人物の正体についての哲学的推測に費やされたが、彼はこの問題をいい頭で合理的に納得のいくように解決したので、どこかほかに気晴らしになるものを求めずにはおれなかった。」

ロビンはまえに宿屋兼居酒屋でその男が仲間たちと声をひそめて話し合っているのを見ており、またその教会のところにくる途中で一団となって速足で去っていく人々に出合い、不可解な合言葉で話しかけられているので、暴動が起ろうとしていることぐらい推測できそうなものだが、変装したその男に一時間後にモリノーがそこを通るといわれても、現実離れした「哲学的推測」をするだけで平然としており、ここではホーソンはもはやロビンの思考内容すら述べずに、現実とのギャップからくる彼の一人よがりを皮肉っているのである。

しかし、この段階になると自分の人生に対する対応様式についてのロビンの疑惑はいよいよ強まってきて、それが

モリノーの存在そのものへの疑惑と、迫りくる孤独感と郷愁となってあらわれるのである。ロビンの眼前に道路を隔てて壮大な邸宅が見え、彼は「多分これこそわたしの探していた屋敷だろう」と考えるが、そこまで行って確かめることもせず、モリノーは既に死に果てているのではないかと思い、まもなくやってきて彼と一緒にモリノーの出現を待ってくれる親切な紳士に彼は、「一晩の半ばを費やしてモリノー少佐という人を探しましたが、そのような人が本当にこの地域にいるのでしょうか、それともわたしは夢を見ているのでしょうか」と疑問を投げかける。また、その紳士があらわれる直前に、彼は月光に照し出された教会の内部を覗き込み、「彼の故郷の最も深い森の奥においてさえも感じたことのないほどの孤独感」に襲われ、その孤独感から逃がれるために、故郷の家の大木の下でその日もおこなわれたに違いない夕べの祈りの光景を頭に描いて郷愁に浸る。が、まもなく眠りにおち、その夢のなかで彼が家族と一緒に家の中に入ろうとすると、掛け金がおりて彼だけが締め出されてしまうのだ。このロビンのこころに生まれたところの、モリノーの生存に関する疑惑と孤独感と郷愁が、ロビンの人生に対する対応様式の不適合性——彼自身はまだそれを十分に自覚してはいないが——の証左であることは明らかで、その不適合性に関する彼の完全な自覚は次のクライマックスの場面を待たねばならないのである。

ロビンは「あなたたちの出合いを目撃するのに異常な好奇心を感ずる」というその紳士とともにモリノーの出現を待つが、やがで群衆の呼び声と哄笑と吹奏楽の騒音が近づき、あの赤と黒に顔を塗りわけた男が、「戦争の化身のように」剣を抜いて馬にまたがり、暴徒の行列の指揮者としてあらわれ、ロビンの側を通りながら彼を真面に凝視し、彼の直前に覆いのない二輪馬車を止める。と、松明に照し出されたその馬車のなかには、タールを塗られ羽毛をまぶされて、尾羽打ち枯らしたモリノーの姿があるのだ。ロビンはその「栄光のうちに白髪となった老人の耐えがたい恥辱を目撃し、」同情と恐怖に膝が震え、髪の毛の逆立つ思いがする。だが、行列をとり囲む群衆はモリノーを罵り、その光景全体に驚くべき嘲笑の波が渦巻いているのだ。そのとき突然ロビンは、ほかならぬ自分自身が嘲笑の的となっ

ていることに気づく。あの夜警が呆然として立ち竦むロビンを見て眠むそうな声で笑い、真紅のペチコートの女はベルのような笑い声を立てロビンの腕を引っぱり、宿屋の主人はエプロンで合図をしながら甲高い笑い声をロビンに送り、あの尊大な老人は道路を隔てた邸宅のバルコニーにあらわれて、咳払いを混えた笑いを爆発させているのである。「そのときロビンには、理髪師たちや宿屋の客や、その夜彼を馬鹿にしたすべての人々の声が聞えるように思われ、」彼は彼自身に浴びせられたその嘲笑のさなかで、人並はずれた、誰よりも鋭い笑い声を立ててしまうのである。ついで行列が動き始め、暴徒たちは君主の死骸にまつわる悪鬼のように、囚われのモリノーを運び去っていくのだ。

「指揮者が合図をすると、行列は再び行進をつづけた。彼らは進んでいった、もはや権力はないが、苦悩においてもなお尊厳を保って死んだ君主のまわりで、あざ笑いながら群がっている悪鬼のように。彼らは偽りの華やかさを誇り、意味のない叫び声をあげ、狂気のように笑い騒ぎ、老人のこころを完全に踏みにじって進んでいった。」

このクライマックスにおいて、ロビンがモリノーの悲惨な凋落の姿に戦慄し、茫然自失したとき、彼はその拠りどころを失ってしまい、自分の人生に対する対応様式の虚偽性を否応なしに突きつけられたのだ。そして次に、それまで彼の現実に対する錯誤を罵倒し、愚弄し、嘲笑した人々が再び姿をあらわして彼を笑いつづけたとき、彼はその対応様式の虚偽性を痛切に教示され、今までその虚偽に縋りついていた自分自身に対して自嘲自虐の笑いをあげずにはおれなかったのである。[38] すなわち、このロビンの自嘲自虐の哄笑は、それまで絶えず繰り返えされてきた町の人々の嘲笑に対する彼の最終的な反応であり、返答であり、現実に対する彼のギャップの解消であり、彼が自分の人生に対する対応様式の虚偽性を自覚して、それを放棄したことを意味するものにほかならないのだ。

だが、このクライマックスの意味は、単にロビンがそれまでの人生に対する対応様式の偽りを知り、それを捨て去

ったというだけではない。神の慈愛に守られた中世人の世界は、地球が太陽を廻わる一惑星にすぎないことを人々が知ったときに崩壊したといわれるように、ロビンの家族にとって安定と栄光の権化であった親戚が、「火と剣の象徴であり、……それらに伴う悲嘆の表示」であるところの暴徒の指揮者によって、惨憺たる姿を晒されたとき、両親に守られたロビンの閉ざされた世界は崩れ去り、彼は孤立した一個人として開かれた大人の世界に立たされたのである。そして、その開かれた世界において彼が知ったことは、この世には彼の父親が称える神のほかに、「火の悪魔と暗闇の悪魔」がいるということであり、平和と秩序と団欒は、暴力と破壊と悲惨にとってかわられるということであり、「威厳を誇示して」彼の家を訪れた親戚が、「偽りの華やかさを誇り」行列を組んだ暴徒の「意味のない叫び声」とともに消えていったように、有為転変と虚勢と虚偽はこの世の習いだということであり、人間の尊厳とか心情というものは、それをあざけり笑う悪鬼によって無残なまでに踏みにじられるということである。これはまさしく、ロビンの無知から知への進展であり、悪の認知にほかならない。

まえにあげたウェストは、二十世紀の短篇を対象に開眼の物語を論じていて、ホーソンのこの作品を解釈してはいないが、開眼の物語に関する彼の次の定義にしたがえば、ロビンは悪を認知し、「生存の限界」を知ったということができるだろう。

「この種の物語は通常作中人物の無知から知への進展を描き出す。神学的な言葉でいえば、その知とは、悪を知り認めることである。しかし、より通俗的な言葉を用いれば、それは生存の限界を――自然（現在）と神話（過去）の両者の限界を――知ることを意味するといえるだろう。[39]……

生存の諸問題に対処する普通の方法は、まず問題があるということを認め、ついでその問題には限定された解決法しかありえないということを理解することである、とその種の物語は示唆する。人道的正義は望ましいことではあるが、直ちに達成しうるものではないということを認めることが知に至る第一段階である、とそれは主張する。[40]さらにそれは、人が知をもって生きることを学んだとき、自己認識の過程における重要な段階が達成される、と考えるのである。

いうまでもなく、開眼の物語 **Initiation Story** とは、この種の物語が原始部族のイニシエイションの儀式に類似しているために名づけられたもので、イニシエイションの儀式においては、適齢に達した若者がいくつかの試練を受け、その試練に耐えぬいたものは、部族の秘密や掟を教授されて戦士の一員に加えられたように、開眼の物語における若者は様々の体験を経ることにより、閉ざされた子供の世界から開かれた大人の世界というより高次の精神的段階に足を踏み入れるとともに、人生の新しい様相に開眼し、社会内自己としての生存の限界を認知するのである。

『わたしの親戚のモリノー少佐』が、こうした主人公の開眼を意図した作品であることは疑問の余地がなく、ロビンが自嘲自虐の哄笑を発するまでの町の人々の罵倒・愚弄・嘲笑は、彼が受けねばならなかった試練であり、試練を耐えぬいた原始部落の若者に秘密や掟が教授されたように、ロビンはその試練を経ることによって悪を――生存の限界を――認知したのである。が、ロビンは大人の世界に一歩を踏み入れ、「知をもって生きる」ほかはないということを学びはしたものの、実際にその世界でどのようにして生きていくかという人生に対する新しい対応様式をまだ身につけてはいないのだ。そこで彼は、暴徒の行列を見送ったあとで、「町の生活がいやになり始めました。渡し場への道を教えてくれませんか」と傍の紳士に訴えるのである。しかしながら、彼にとっては、あの教会の前での夢が啓示していたように、もはや閉ざされた子供の世界は存在していないのだ。彼は生存の限界の認知という足場に立って、あの尊大な老人や理髪師や宿の主人や売春婦や夜警とともに生きることにより、人生への新しい対応様式を形成するほかはないのだ。それゆえにこそホーソンは、この作品をロビンに対する紳士の[41]次の忠告で終わらせているのである。

「君がわたしたちと一緒にとどまることを好むなら、君は頭のいい若者だから、多分君の親戚のモリノー少佐の援助なしで世に出ることができるだろう。」

最後に、この作品に対する精神分析学的批評について一言しておかねばならない。この派の批評を代表するものはS・O・レッサーの解釈であるが、彼によれば、ロビンが渡し守にモリノーの住所を聞きそんじたことや、彼が目を輝かせて町に足を踏み入れることや、洋行帰りの若者たちを見詰め、ショーウインドの豪華な品物を眺め廻すのは、「町が有力な親戚を探すこととは全然関係のない理由でその若者を魅了する」[42]からであり、売春婦にモリノーの住所を尋ねるのは「ロビンが無意識的に性的冒険を求めている」[43]からにほかならず、さらにレッサーによれば、モリノーは「束縛と歓迎しがたい権威の象徴」[44]であり、「若者がそれからの解放を熱望しているところの父親の諸相をあらわす」[45]人物ということになるのだ。

そしてレッサーは、この作品に関して次のような結論を打ち出しているのである。

> 意識的なこころにとっては『わたしの親戚のモリノー少佐』は、野心的な若者が彼の探し求める有力な親戚の探索を妨げられる物語である。無意識的なこころにとってそれは、親戚――及び父親――に対する若者の敵対的・反抗的感情の物語であり、大人の支配からの解放を願望する物語である。」[46]

しかしながら、この精神分析学的解釈はこの作品の主体を――ロビンの属性と、客観的現実に対する彼のギャップと、彼と町の人々との相互反応と、彼にとっての暴動の意味を――完全に無視した独断的解釈という点では、この作品を歴史的寓話とする解釈とかわりない。作品の幹を無視し、枝葉を不当に拡大すれば様々の見方が成り立つのは当然で、この作品にこうした精神分析学的解釈[47]や歴史的寓話としての解釈が加えられるのは、この作品の幅でもなければ、ホーソンが「その意図の達成に失敗した」[48]ためでもなく、――ただし彼が一部の読者を惑わすところの歴史的背景に関する緒言を付したことは失敗であるが――結局のところこの作品そのものに対する読みの不足に由来しているといえるだろう。

〔注〕

(1) 拙著『アメリカ短篇小説の研究――ニュー・ゴシックの系譜』序四一五頁（南雲堂）

(2) Neal Frank Doubleday, *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* p.234. (Duke Univ. Press)

(3) Simon O. Lesser, *Fiction and the Unconscious* p.223. (Peter Owen Limited)

(4) N.F. Doubleday, p.228.

(5) Q. D. Leavis, "Hawthorne as Poet," *Interpretations of American Literature*, ed. C. Feidelson and P. Brodtkorb, p.45. (Oxford Univ. Press)

(6) (7) *Ibid.*

(8) *Ibid.*, p.46.

(9) (10) *Ibid.*, p.44.

(11) Daniel Hoffman, *Form and Fable in American Fiction* p.117. (Oxford Univ. Press)

(12) (13) (14) *Ibid.* p.118.

(15) (16) *Ibid.*, p.119.

(17) *Ibid.*, p.124.

(18) Doubleday, pp.229-230.

(19) 以下 "My Kinsman, Major Molineux" からの引用はすべて *The Works of Nathaniel Hawthorne* (Standard Library Edition, Mifflin and Company) によるが，1々頁数を付記しない。

(20) Doubleday, pp.230-231.

(21) *Ibid.*, p.233

(22) (23) *Ibid.* p.234.

(24) Seymour Gross, "Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux': History as Moral Adventure," *A Casebook on the Hawthorne Question*, ed A. M. Donohue, p.52. (Thomas Y. Crowell Company)

(25) *Ibid.*, p.58-59.

(26) (27) (28) *Ibid.*, p.59.

(29) Ray B. West, JR., *The Short Story in America* p.92. (Gateway Editions, INC.)

(30) William Bysshe Stein, "Teaching Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux'," *College English* (November 1958) p.83.

(31) *Ibid.*, p.84.

(32) (33) (34) *Ibid.*, p.86.

(35) D. Hoffman, p.120.

(36) Doubleday, p.229.

(37) Malcolm Cowley (ed), *The Portable Hawthorne* p.28 (The Viking Press)

(38) このロビンの笑いについて、J・C・スタブスは、「なぜロビンが笑うのかという理由よりも彼が笑うという事実、すなわち彼がモリノーに対する町の人々の攻撃に加わるという事実がより重要である」John Caldwell Stubbs, *The Pursuit of Form: A Study of Hawthorne and the Romance* p.70. (Univ. of Illinois Press) といい、リーヴィス女史は、このロビンの笑いを、モリノーに対する町の人々の「勝利」にロビンが同調したものと見做している。Leavis, p.49. しかし、この二人はいずれも、このロビンの笑いがモリノーに向けられたものではなく、町の人々がロビンに浴びせた最終的な嘲笑に対する彼の反応であることに気づいていないのである。

ロビンは決してモリノーを笑ってはおらず、自分の人生に対する対応様式の虚偽を悟りえなかった自分自身を嘲笑しているのだ。モリノーがなぜリンチにかけられ愚弄されているのかその理由さえ知らないロビンが、モリノーに対する人々の嘲笑に加わることによってモリノーの何を笑い、何を攻撃しようとするのであろうか。

(39) R. B. West, p.92.

(40) *Ibid.*, p.93.

(41) この紳士と暴徒の指揮者は、C・G・ユングがいうところの「聡明な老人」Wise Old Man の役割を果たしているということができるだろう。ユングが「聡明な老人」の適例としてあげたある神学生の夢のなかの白い魔術師と黒い魔術師の役割は、この作品において紳士と暴徒の指揮者が果たす役割とかなりの類似を示している。*The Basic Writings of C. G. Jung* ed. V. S. De Laszlo pp.318-321. (The Modern Library) しかしながら、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』The Adventures of Huckleberry Finn のジムや、フォークナーの『熊』The Bear のサム・ファーザー

ズ、あるいは『杜子春伝』のなかの老人に比ぶれば、この作品における「聡明な老人」の表出像はいささか曖昧である。

(42) S. O. Lesser, p.219.

(43) *Ibid.*, p.220.

(44) *Ibid.*, p.222.

(45) *Ibid.*, p.221.

(46) *Ibid.*, p.223.

(47) この作品に精神分析学的解釈を加えたものは、他にR・R・メールやF・クルーズなどがいるが、彼らの解釈はいずれも大同小異である。ただメールは、「この悪夢のような夜の意味を解く手掛りは、夢解釈についてのフロイド理論によって提供されていて、父親的人物像は普通二つないしそれ以上の像に分割される。とその理論は主張している」Roy R. Male, *Hawthorne's Tragic Vision* p.49. (The Norton Library) と述べ、単にモリノーだけではなく、尊大な老人も、夜警も、宿屋の主人も、暴徒の指揮者も、忠告を与える紳士も、一様に父親的人物像の範疇で捉えており、クルーズもまた、「ロビンは彼に対して極度の侮蔑ないしは仁愛―通例前者であるが―を示すところの父親的人物によってせめたてられる」Frederick Crews, *The Sins of the Fathers : Hawthorne's Psychological Themes* p.75. (Oxford Univ. Press) といい、メールと同じ見解に立っている。

(48) Doubleday, p.228.

〔後記〕 この論文の筆者、元田脩一教授（アメリカ文学）は初校が出た直後の昭和五十二年一月十七日に死去され、この論文は同教授の遺稿となった。教授のご冥福を心からお祈り申し上げる。（編集委員）